# 赤土山古墳

## 第1次範囲確認調査概報

1989

天理市教育委員会

# 序　　文

名阪国道の走行中、車窓からシャープ総合開発センターが目にとまります。赤土山古墳は、そのすぐ西側にあり、山の上に立地した古墳の形が非常によく目立つ古墳です。この付近は東大寺山古墳群と呼ばれ、赤土山古墳の他に東大寺山古墳、和爾下神社古墳など100mを越す大形の前方後円墳があり、考古学においても重要視されています。かつて古代には、葺石をめぐらした白く輝く古墳が深緑を背景に一際目立っていた様子が想像されます。

古墳群の中心的な存在となっている東大寺山古墳では、昭和36年に発掘調査がおこなわれ多くの刀が出土し，中平の年号が入った銘文大刀や、柄頭に取り付ける家形の環頭が発見され重要文化財に指定されています。東大寺山古墳群は古代の貴重な遺産がねむっている所であり、古代豪族の聖域として利用されてきた土地だと言えます。そうした中にあって赤土山古墳については、古墳の実態がよくわかっていませんでした。天理市教育委員会では、古墳の保存を前提に範囲確認調査を実施した所、100mを越す大形の前方後方墳であることが判明し、大和の古代史や国家形成してゆく時代を考えてゆくのに欠くことのできない古墳であることがわかりました。

最後にあたりこれらの調査に御協力いただいた土地所有者吉川新太朗氏をはじめ各位に感謝申し上げると共に、今後とも文化財行政にご協力賜わりますようお願い申し上げます。

平成元年３月

天理市教育委員会

教育長　上 司　幸 男

# 例　　言

1．本書は、奈良県天理市櫟本町に所在する赤土山古墳の範囲確認調査概報である。

2．赤土山古墳の範囲確認調査は、国庫補助事業として天理市教育委員会が実施した。

3．調査期間は、1987年８月17日より1988年１月31日までと、1988年５月９日より1988年７月８日までの２ヶ年にわたっておこなった。

4．調査にあたって土地所有者の吉川新太朗氏をはじめ地元の方々に多大な協力をいただいた。その他、発掘調査においては、福島永（奈良大学ＯＢ）、田渕弥生、吉村とも子に調査補助を得、古墳に関する検討会においては、橿原考古学研究所より、石野博信（副所長）、泉森皎（調査課長）、河上邦彦（主任研究員）、今尾文昭（所員）の他、金関恕（天理大学教授）、置田雅昭（天理大学附属天理参考館学芸員）各氏に御教授を得た。

5．発掘調査ならびに概報の執筆編集は、天理市教育委員会、社会教育課の松本洋明が担当した。

# 目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1

Ⅱ　調査の概要…… 5

Ⅲ　埴輪について……12

Ⅳ　まとめ……15

Ⅴ　赤土山１号墳の企画性に関する所見……17

# Ⅰ はじめに

## (1) 古墳の位置と調査の動機

天理市北部の櫟本町に所在する東大寺山古墳群は、大和盆地東側の山地より延びる高瀬川北岸の丘陵先端部に位置し、古墳時代前期の大型前方後円墳と前方後方墳を中心に広がる古墳時代前期から古墳時代終末期にかけての古墳地帯である。

特に標高134.2mを最高峰とする東大寺山の頂上付近に立地している全長140mの東大寺山古墳（前方後円墳）と、標高118.5mの東西に延びる尾根筋頂上部に立地した全長110mの赤土山古墳（前方後方墳）に対して、全長110mの和爾下神社古墳（前方後円墳）や、全長55mの櫟本墓山古墳（前方後円墳）は、尾根筋先端の山麓地帯に立地している。東大寺山古墳群では、同じ古墳群において山頂部と山麓部に分かれて立地する大形古墳の立地状況が見られ、大和盆地の東麓に所在する大和古墳群や柳本古墳群と比べて独特な様相がある。

東大寺山古墳群は、大部分の範囲が第一種住居専用地域と準工業地域に指定されており、開発促進の可能な地域に位置づけられ、すでに工事が始っている。赤土山古墳も、そうした開発の影響を受ける可能性が非常に強くなった。そのため古墳の正確な範囲の認識と保存促進を検討するところとなった。

## (2) 赤土山古墳の立地と景観

赤土山古墳は、東大寺山古墳群の南面に位置する比高26mほどの尾根筋上に立地している。古墳群の南側を東西に流れている高瀬川とともに主軸を東西に設定した古墳で、むしろ高瀬川の谷筋に面して平行に築いた古墳と考えられる。

赤土山古墳から見える景観は、生駒山系の南半から二上山、葛城・金剛山系、御所市、高取町、明日香村に位置する大和、南部の山々、さらには紀伊山地一帯の1000mを越す山丘地帯まで視界に入る。また大和盆地内は、大和郡山市の南半から田原本町、さらに橿原市より南西側に位置する広い一帯を見ることができ、大和盆地の西部から南部にかけての視界が非常によい所にある。しかし、大和古墳群や柳本古墳群、箸墓古墳などが所在する天理市南部から桜井市にかけての山麓一帯地域は、高瀬川の南岸にあたる標高127mの平尾山によって視界がさえぎられ、龍王山や三輪山などの山頂部が見えるだけである。また北から東方にかけては、現状で工業地帯として開けているが、かつては標高120～130mの丘陵地帯であったため、まったく遠望のきかない状態であった。

それに対して東大寺山古墳群の西側に面して立地する東大寺山古墳と和爾下神社古墳は、墳丘の主軸を南北に設定した大型古墳で、南北に長大な大和盆地の地形に合せて主軸を設定した古墳であることが察せられる。そのため大和盆地全域を遠望することができ、特に山頂部に立地している東大寺山古墳では、大和盆地の北方よりはるか山城地域（京都府南部）や摂津地域の山々まで見ることができる。こうした東大寺山古墳群の南側に面して築いた赤土山古墳と、西側に面して築いた東大寺山古墳や和爾下神社古墳、櫟本墓山古墳とは、同じ古墳群であっても立地条件の違いから歴史的背景の異なった意義をもつ古墳と考えられる。

図1　古墳の位置図（S 1/1000）
1. 赤土山1号墳（前方後方墳）　2．赤土山2号墳(円墳)　3．赤土山3号墳(方墳)
4. 東大寺山古墳（前方後円墳）　5．和爾下神社古墳(前方後円墳)　6．櫟本墓山古墳(前方後円墳)

### (3) 古墳の現状と旧地形

標高118.61ｍを最高所とする赤土山古墳は、古墳の南側を東西に流れる高瀬川の谷地形と平行に延びた丘陵上に立地している。赤土山古墳の立地する尾根筋は、幅100ｍ、上面幅30ｍほどの大きさで、標高89～95ｍの水田が広がる高瀬川の谷あいと比べて比高20～25ｍほどあり、見た目では高く見える山である。東大寺山古墳が立地している標高134.2ｍの東大寺山とは龍王上池、龍王下池がある幅20ｍほどの谷筋によって地形が分かれており、赤土山古墳の立地する丘陵と東大寺山とは連なっていない。東大寺山古墳の立地する丘陵とは独立した地形に立地している古墳である。赤土山古墳の東側一帯には、シャープ総合開発センターがあり、旧地形をかなり損なっている。開発が進む以前の地形図を見ると（図２）、標高133.9ｍの東大寺山25号、26号墳の立地する丘陵を高峰に枝分れして延び出ていた尾根筋であることがわかる。また赤土山古墳の北側にあるシャープ総合開発センター男子寮の地点も、かつては25号、26号墳が立地する高峰から枝分れ状にあった標高120ｍほどの赤土山古墳を越した丘陵が延びていたことがわかる。赤土山古墳の立地していた様相が、現状においてかなり異っていることがわかる。赤土山古墳の立地している尾根筋南面に接して高瀬川が流れているが、あまりにも丘陵に接近しており人工的な流路である可能性が感じられる。かつては、谷あいの中央部に自然流路が存在していたものと思われ、赤土山古墳の尾根筋からさらに派生して枝分れ状の尾根筋がかつては高瀬川の流れる谷あいに向って延びていたことが推察される。

写真１　伐採前の全景

写真２　伐採前の墳頂部

写真３　伐採前の前方部南面

赤土山古墳は、調査直前までかなり険しい雑木林であった。前方部の先端部から、２・３号墳の立地する西側一帯には竹林が広がり、赤土山古墳の前方部の付近を境にして、後方部一帯はクヌギなどの雑木林になっていた。雑木林であった地点はあまり攪乱を受けていないため原形を良く留めていたが、竹林になっていた前方部先端からその

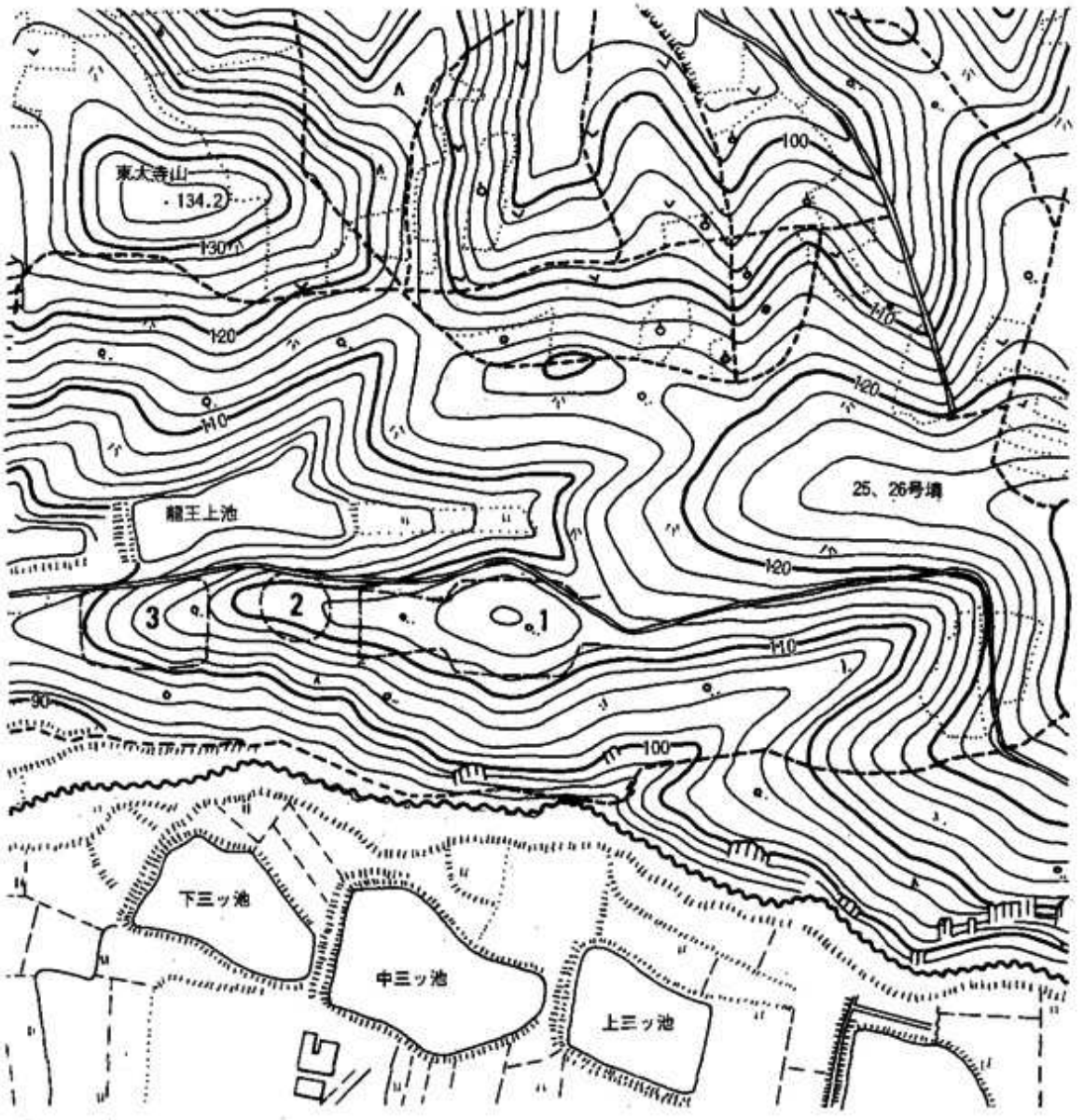



図２　赤土山古墳の旧地形図（S 1/3000，図面上方が北位）
１．赤土山１号墳　　２．赤土山２号墳　３．赤土山３号墳

南斜面にかけては竹林に伴う攪乱が激しく原形をかなり損っていることがわかった。特に前方部南西側の隅は残りが非常に悪い。その反面、前方部北西隅の残りは良好であることが確認されていた。しかし、調査の直前において開発に伴う破壊を受け一部原形を損う状態におちいった。なお第６調査区を調査して掘り割りの残り具合を確認した所、かろうじて原形を残していることが判明し、前方部の北西隅は発掘調査によって原形を復元することが可能な状況であることを確認した。

### (4) 調査方法

発掘調査は、保存を目的とした調査方法をとり、古墳の残っている状況をできるだけ現状保存していくことにつとめ、古墳の範囲確認と遺構の状況を的確に把握することにした。よって調査区の設定は、幅1～2mの小規模なもので設定し、必要に応じて調査区の拡張を実施し遺構の形態や性格を調べることにした。

しかしながら赤土山古墳の西側尾根上に立地する2、3号墳は、すでに開発計画がなされており、また赤土山古墳を取り巻く地形や環境においてもかなりの現状変更がなされてゆく可能性が強くなってきた。よって墳丘部の雑木や竹林を伐採し、現状地形における墳丘の撮影や測量調査をおこなって、丘陵上に立地している様相と東大寺山古墳群の中でも南側に位置した状況を記録保存してゆくことにつとめた。

調査は昭和62～63年度にわたって実施し、62年度は、測量、撮影と、墳丘の北面から西面にかけての範囲確認調査（第1調査区～第6調査区）をおこない。63年度は、測量と墳丘の南面にわたる範囲確認調査（第7調査区～第10調査区）を実施した。

## Ⅱ　調査の概要

### (1) 測量調査

赤土山古墳は、すでに置田雅昭氏によって測量調査がおこなわれ、東西に主軸をもつ全長89mの2段築成からなる前方後方形の古墳であることが報告されていた。今回古墳の立地する地点を伐採することによって墳丘の斜面が従来の認識していた地点よりさらに山裾にまで広がっていたことを確認し、また丘陵の斜面にも古墳築造に係る階段状になったテラス地形を確認したため、測量の範囲を山裾まで含めた広範囲にわたって実測した。

測量の結果、赤土山古墳西側尾根筋上において2基の古墳を確認した。よって前方後方形の墳丘をもつ従来の赤土山古墳を改めて赤土山1号墳とし、尾根筋上に連接している古墳を2・3号墳とした。

### (2) 第1調査区

前方部前面の掘り割りを確認するために設定した調査区で、長さ15m、幅1mにわたって調査をおこなった。

調査区の中央部で深さ1m、検出した幅約6mの掘り割り遺構と墳丘を段築成形していたと思われるテラス状の遺構を検出した。掘り割りは地山を成形し

写真4　調査風景

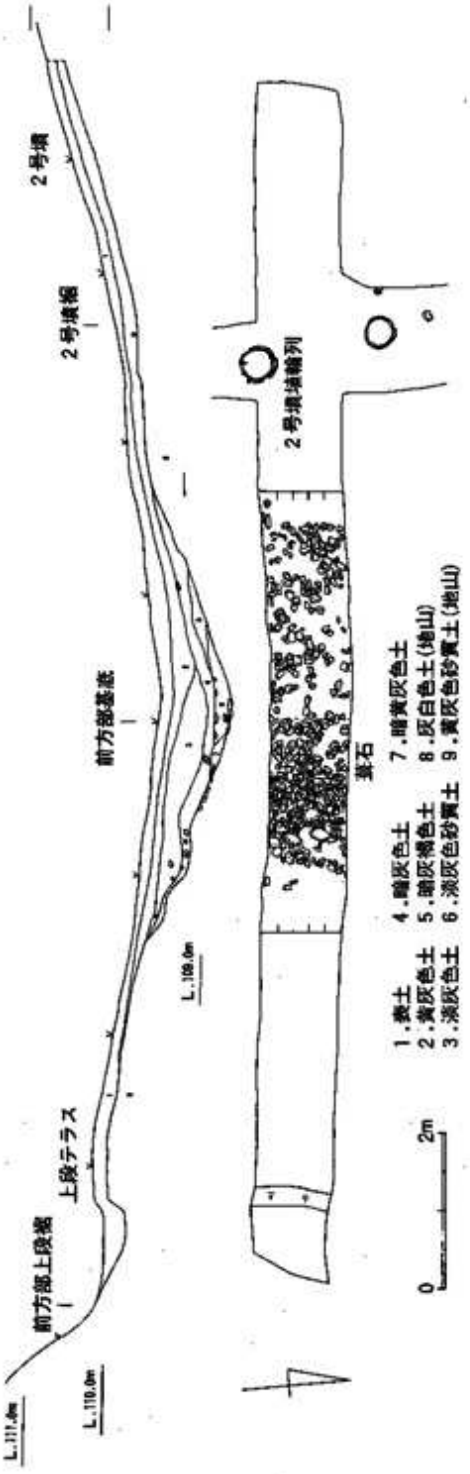



図3　第1調査区(S $\frac{1}{100}$)

た掘り抜きで、赤土山1号墳の斜面において密に重ね合せたこぶしほどの大きさをもつ葺石を確認した。また掘り割りは、赤土山1号墳の西側に並ぶ2号墳と共有していた。2号墳は、掘り割りまで含めて考えると2段築成による円墳である。段築のテラスより埴輪列を検出した。埴輪列の状況から測ると、中段での規模が径20～22mの墳丘であったことがわかる。

(3)　第2調査区

前方部の北側墳丘裾を確認するために設定した調査区で、長さ19m、幅1mにわたって調査をおこなった。

これまで墳丘の北側にある山道までを墳丘の範囲として考えられていたが、山道よりさらに下方においても赤土山1号墳に伴う墳丘の傾斜と葺石を検出し、墳丘の裾がさらに山裾まで広がっていることが明らかとなった。また墳丘の裾部で幅1.5m、深さ50cmの溝状遺構を検出し、墳丘の裾を溝で区切っていた。山道の地点で赤土山1号墳に伴う埴輪列を3本検出した。埴輪は径30cm程の円筒埴輪で、段築によるテラス部分に沿って埴輪を並べていたと思われる。

墳丘の裾には埴輪を並べてはいなかったが、墳丘の裾で検出した溝より4世紀後半から5世紀初めに位置づけられる土師器の破片が出土した。

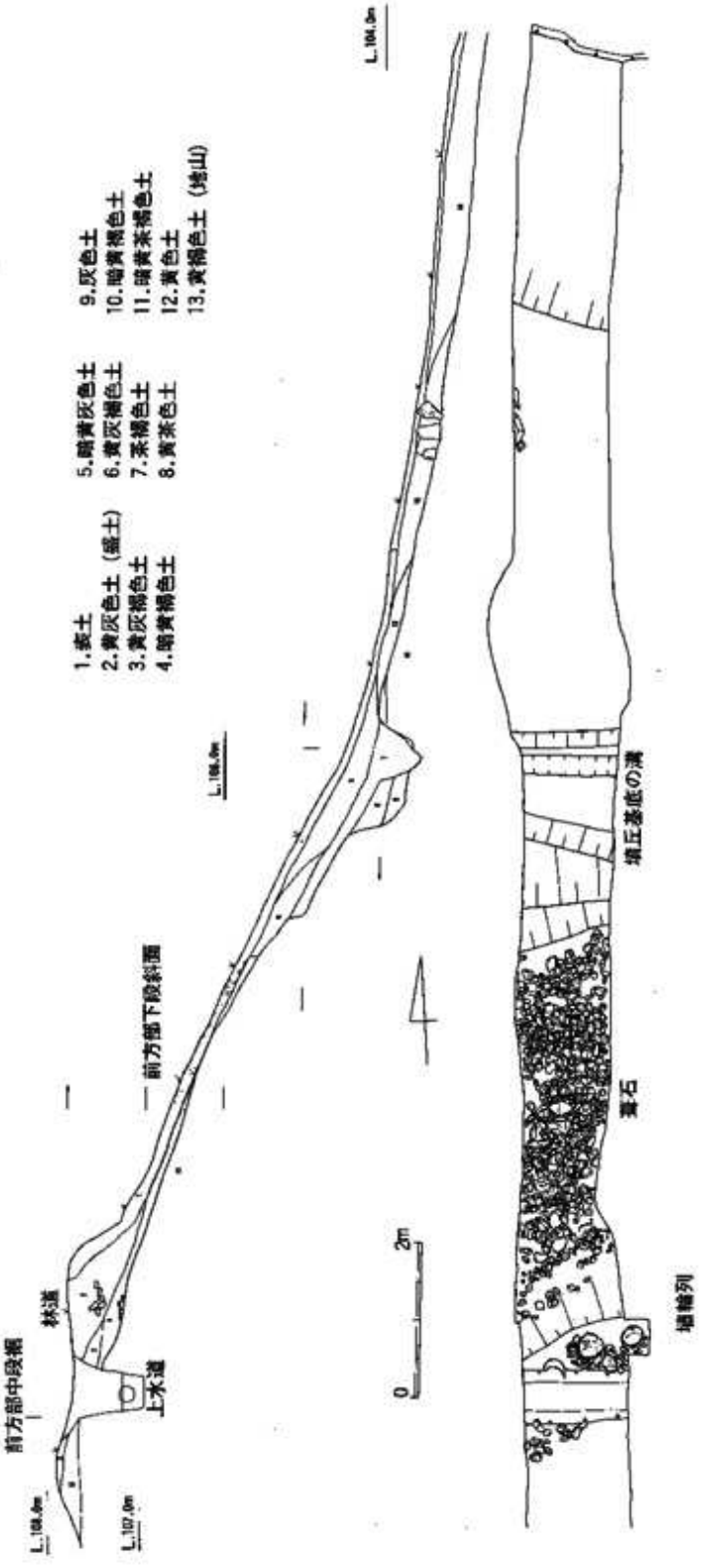



図4　第2調査区（S 1/100）

(4)　第3調査区

墳丘のくびれ部分（前方部と後方部の接点）を確認するために設定した調査区で、長さ20m、幅1mにわたって調査区を設定し、一部拡張調査も実施した。

調査によって前方部が3段築成で造られていたことが判明し、調査区は前方部上段裾のテラス部分から下方にかけて設定していた。

上段裾のテラス部分は幅2mほどで、葺石と埴輪列3本を検出し、前方部の上段裾に沿って埴輪をめぐらしていたと思われる。中段裾とテラス部分は、山道よりやや上方で検出した。上段裾のテラスに比べて幅1mほどで狭い。埴輪の破片が多数出土したが埴輪列は残っていなかった。墳丘の裾は山道の直下1.4mの地点で、墳丘に伴う急斜面の裾部を検出した。しかし、その外側にも葺石が伴うなだらかな傾斜面と幅0.5～1m、深さ30～50cmの墳形に沿った小溝遺構を検出した（SD－02）。調査区を拡張して小溝をさらに検出した所、くびれ状に小溝が区画されており、第2調査区の墳丘裾部で検出した溝遺構（SD－01）と同じく赤土山1号墳の基底部を区画した溝であることが判断された。おそらく墳丘の急斜面に伴う裾部とは別にくびれ部分においては、なだらかな傾斜によるテラスが成形され、その外側を小溝で区画し

ていたと思われる。

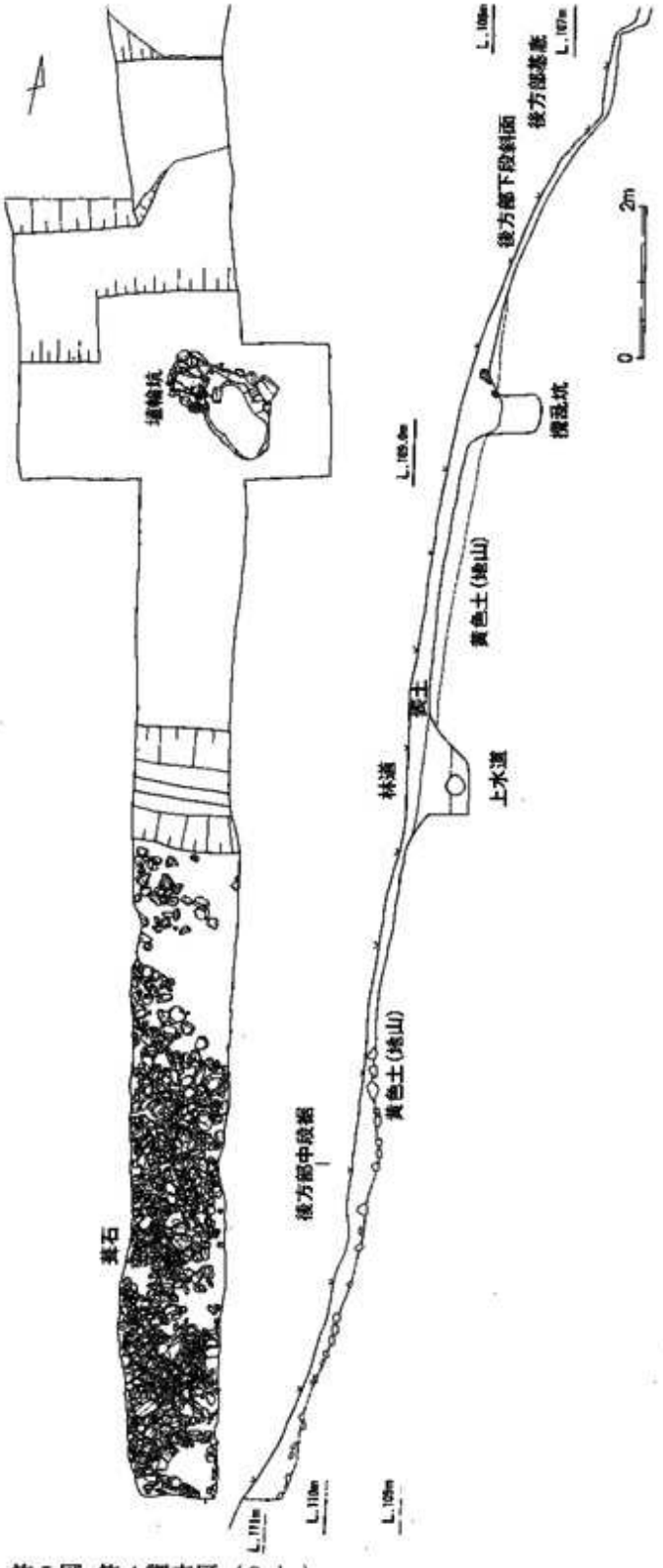
赤土山１号墳の基底部北側において、径５～６ｍの小円墳を確認し、くびれ部を区画した溝を掘り割りとして共有していた。さらに小円墳の東側掘り割り内において、幅40cm、長さ１ｍの小形竪穴系石室を検出した。赤土山１号墳のくびれ部基底を区画していた溝は、小円墳の伴う掘り割りと同一土層で埋っており（No11層）、土層の検討から小円墳と赤土山１号墳との前後関係を比べるのは難しい。溝内より布留式の甕が出土している。

また掘り内で検出した小形竪穴系の石室は、掘り割りがある程度まで埋った段階で築いており、赤土山１号墳や小円墳よりかなり後の段階（古墳時代後期～終末期）の石室と思われる。

(5) 第４調査区

後方部の北側墳丘裾を確認するために設定した調査区で、長さ20ｍ、幅1.5ｍにわたって調査をおこなった。

調査によって後方部北側の上段裾部とその裾部外側に広がる幅広いテラス状の遺構、さらに後方部に伴う基底部を検出した。後方部の上段裾部には、幅4.5ｍにわたって径15～20cmの比較的大きな石を用いた葺石を施すゆるやかな傾斜面を成形していた。後方部には、前方部のように明瞭な段築成によ




第５図 第４調査区（S 1/100）

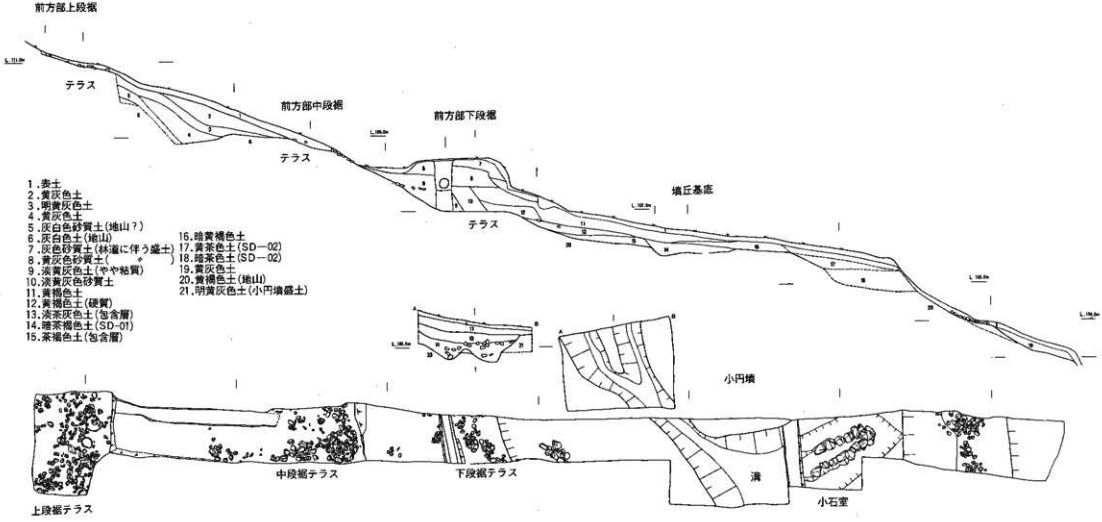



図6 第3調査区 (S1:80)

る墳丘成形をおこなっておらず、特に中段の墳丘斜面が判然としなくなっている。しかし葺石を施したゆるやかな斜面が標高110m前後の位置にあり、第3調査区で検出した中段斜面とレベル的に一致しており、また地形的にも連なりが観取できる点から考えて、葺石が残るゆるやかな斜面を中段築成に係る構造として判断することができる。

中段の外側には幅10mほどにわたって地山成形によるなだらかな傾斜をもつテラスがある。テラスの北端部は急斜面になって地

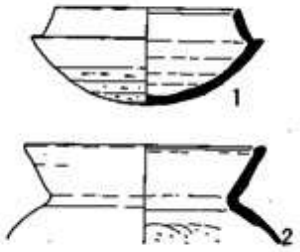



図7　1.埴輪棺内出土の須恵器
2.くびれ部出土の土器(S$\frac{1}{4}$)

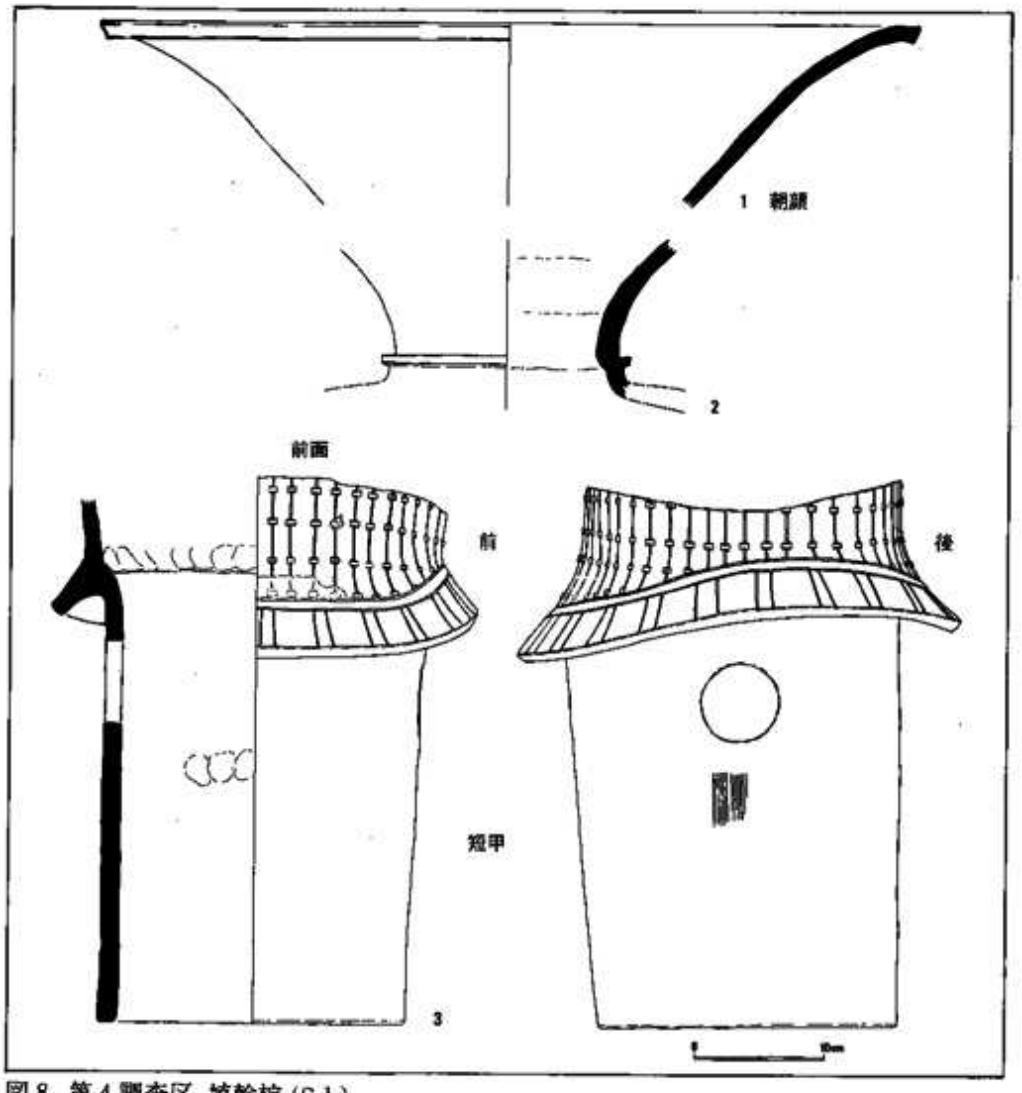



図8　第4調査区、埴輪棺(S$\frac{1}{8}$)

形が落ち込んでいる。この急斜面裾部と第３調査区で検出した墳丘基底部に伴う溝の位置関係から考えると、北端部急斜面と前方部下段斜面との連なりが観取され、テラスの外側に後方部下段に伴う墳丘斜面と基底部が考えられる。赤土山１号墳に伴う墳丘基底は、北端部で検出した急斜面の裾が基底と思われる。またテラス状のなだらかな斜面上において転用した埴輪棺による埋葬施設を検出した。埴輪は、竪矧板革綴短甲を模倣した器財埴輪と円筒埴輪を埴輪棺に転用し、その際に短甲形埴輪の上半部を欠いて用いていた。短甲形埴輪は上半部を欠損しているが、幅の細長い竪板を革紐でつないだ状態を忠実に描いている。

(6) 第５調査区

赤土山２号墳の埴輪列を検出するために設定した調査区で、長さ16m、幅１～1.5mにわたって調査をおこなった。

調査の結果、２号墳に伴う南東側の埴輪列４本を検出し、第１調査区で検出した埴輪列と合せて９本の円筒埴輪を確認したことになる。また埴輪の並んだ形状から２号墳は、円墳であることが確実になった。

(7) 第６調査区

第１調査区で検出した掘り割りは、底面が標高108.4m、深さがおよそ１mの浅いものであった。しかし第２調査区で検出した前方部下段の裾は、標高106mで、掘り割りの底面より約2.5m低くなっており、前方部前面の掘り割り底面と前方部側面の墳丘基低部との高さがまったく異っていることがわかった。このため掘り割りの造りと前方部下段裾部との連なりがどのような形状で造り上げられているのか問題があり、長さ11m、幅1.5mにわたって第１調査での北側に平行して調査区を設定したものであった。調査は途中で中止したが、第１調査区で検出した掘り割り底面よりさらに低いレベルで掘り割りに伴う埋土を検出した。おそらく掘り割りの底面を、南北アーチ状に成形していたものと考えられる。

(8) 第７調査区

前方部南側の墳丘裾を確認するために設定した調査区で、長さ23m、幅2.5～3mにわたって調査をおこなった。

調査によって赤土山１号墳の前方部裾に係りをもつと考えられる地山成形による急斜面とその裾部を検出し、斜面裾の外側には幅10mにわたって平坦な地山成形によるテラス状の地形が成形されていた。また斜面裾部には、幅1.5～2mの浅い窪み状の流路が区画されていた。

(9) 第８調査区

後方部の南側において墳丘裾を確認するために設定した調査区で、長さ26m、幅1.5mにわたって調査をおこなった。

調査によって後方部上段の墳丘裾から幅広い地山成形のテラスをもつ２段築成による後方部墳形を検出した。後方部の形態は東半部と西半部とで異り、尾根筋を取り込んだ東半部は、明瞭な２段築成で墳形を築いているようである。また後方部の北側では、後方部北面の東側半分も南面と同様な２段築成による墳形が残っている。現状は林道によって攪乱を一部受けているためわかりにくい

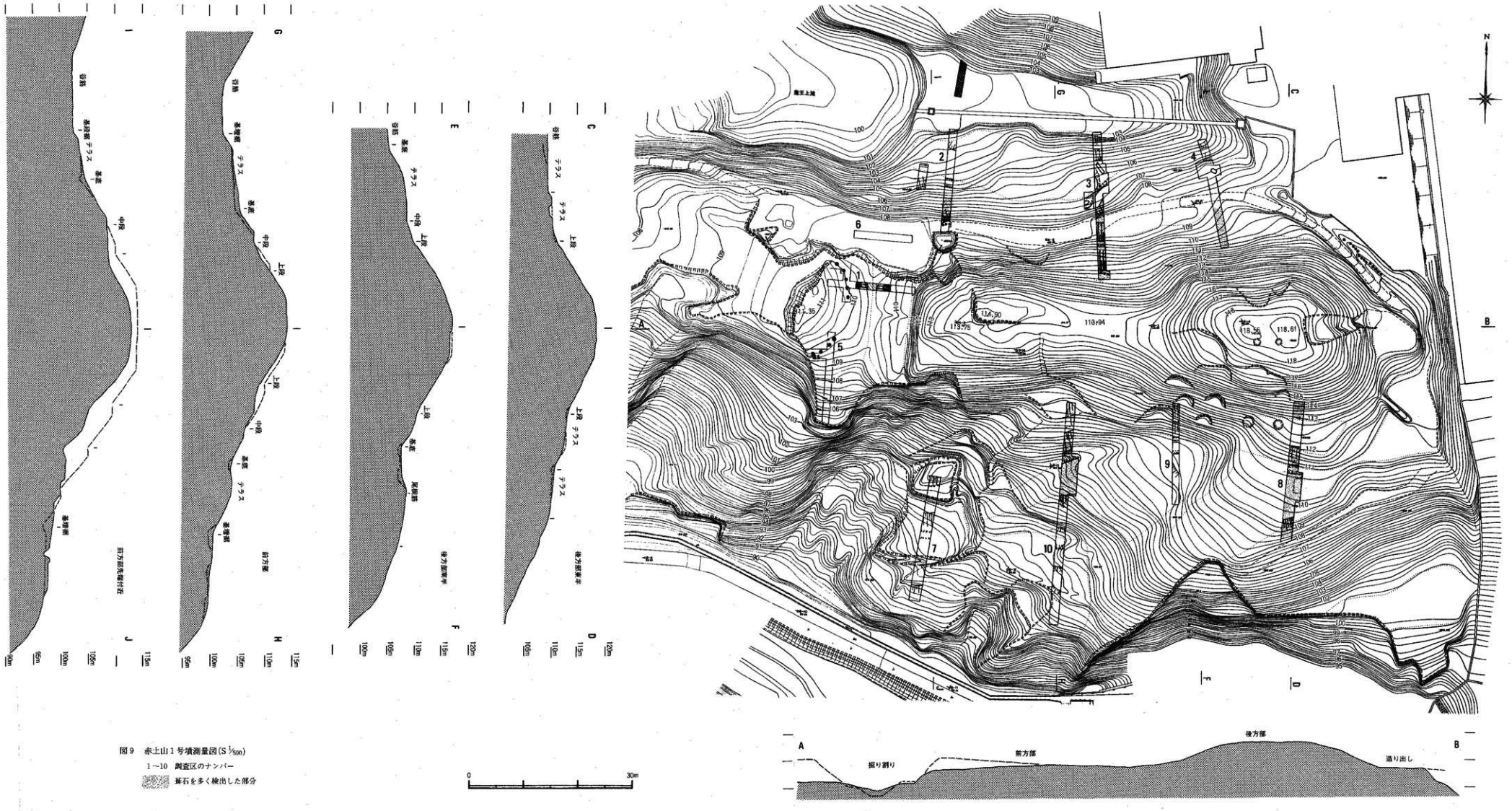



図9　赤土山1号墳測量図(S 1/500)

1～10　調査区のナンバー

葺石を多く検出した部分

が、林道の外側に段築の痕跡が残っている。

後方部の墳形は、東側と前方部よりの西側とで異っていることが指摘できる。おそらく東側半分は２段築成、前方部よりの西側半分は、３段築成で前方部の墳形と係りをある程度意識した形状にしていることが考えられ、東西対称な墳形をもつ独特なスタイルといえる。墳丘の裾部には幅1.5～２ｍの溝があり、さらにその外側においておびただしい葺石を検出した。葺石を敷きつめた地点を拡張調査した結果、葺石が西から東に向って落ち込み状に区画されていることが判明し、石組みによる外部施設を築いていた可能性が強くなった（図版 12)。調査区が幅狭いため外部施設の性格はわからない。後方部の南側には、一段高くなった南西に延びる尾根筋の地形があり、自然地形による尾根筋を取り込んで後方部の南面を区画していたと思われる。おびただしい葺石を検出した外部施設も一段高くなった尾根筋上に立地しており、墳丘の築造と平行して尾根筋も削平して赤土山１号墳に伴う兆域を区画したものと思われる。

(10) 第９調査区

後方部の南西側において墳丘裾を確認するために設定した調査区で、長さ19ｍ、幅１ｍにわたって調査をおこなった。

調査の結果、後方部の西側には第８調査区で検出したような幅広いテラス状の段築が造られていなかった。同じ後方部でありながら墳丘のスタイルが極端に変化する独特な墳形であることがわかった。これは後方部を築造する際に自然地形による尾根筋の取り込み方の違いから生じたことが予測され、墳丘の基盤となる地形的な異りが要因にあげられる。墳丘の裾部に幅３ｍ、深さ0.8～１ｍの溝遺構を検出した。

(11) 第10調査区

前方部南側の中央付近において、墳丘裾と赤土山１号墳に係る遺溝を検出するために設定した調査区で、長さ42ｍ、幅1.5ｍにわたって調査をおこなった。

調査によって前方部中段裾とそれに伴うテラス、墳丘基底部（前方部下段裾）とそれに伴う幅１～1.5ｍ、深さ0.4～0.5ｍの溝を検出した。また墳丘基底部の外側にも地山成形による段築の地形が広がっていた。

墳丘斜面は、前方部の上段から中段にかけて竹林による影響を受けており攪乱が激しい。中段裾から基底部にかけての斜面は、墳形は比較的良く残っていたが葺石の残りはあまり良くない。基底部にある溝の外側には、幅６ｍほどの段築による広いテラスが造られており、おびただしい葺石を検出した。墳丘基底の外側にも赤土山１号墳に伴う外部施設の存在が予測される。また基底部外側の段築斜面の裾にも幅２ｍ、深さ１ｍほどの溝遺構を検出した。この溝は第７調査区で検出した墳丘に伴う斜面裾の流路と区画的に一致している。基底部の外側で検出した地山成形による段築は、赤土山１号墳に伴う基壇状の遺構である可能性が強く、段築の裾で検出した溝は、そうした区画的な遺構と思われる。

# Ⅲ　埴輪について

(1) 出土状況

赤土山１号墳は、以前から埴輪の伴う古墳として知られている。特に多数の埴輪類が表採されているようで、墳頂部に方形にめぐる埴輪列があったとされる意見もある。しかし現在の所、墳頂部で表採できる埴輪片は非常に少ない。昭和58年度にあった後方部北東側での削平工事の際におこなった立会調査では、赤土山１号墳に伴う14本の埴輪列を検出しており、調査による埴輪類の検出は、この時が初例である。

今回おこなった範囲確認調査では、３段築成の前方部において、上段裾と中段裾に埴輪列を確認しており、墳頂部にも埴輪が並べられていたことを推定すると、墳頂から中段まで埴輪が並び、墳丘の基底部にあたる下段築成の裾には、埴輪が並べられていなかったと思われる。

調査で出土した埴輪の大部分は破片であった。一部埴輪列を検出したことにより埴輪底部も検出している。しかしいずれの埴輪列も現状を維持しておきたい理由から、検出した埴輪列はそのまま残した。よって赤土山１号墳から出土した埴輪類の報告は出土した一部の破片に限る。

(2) 円筒埴輪

出土した埴輪片の大部分は、器面の風化が激しく、ハケ調整を確認できるものは非常に少なかった。しかし比較的ハケ目の残っていたものから判断すると、タテハケを残すもの、タテハケの後にヨコハケを加えているものの２種がある。特に前者の例は埴輪底部に目立ち、ヨコハケはいわゆるＡ種に限られているようである。

凸帯は剝離したものがあり断面にも接合した痕跡を観察することができる。凸帯の接合はタテハケ、ヨコハケの後に接合しており、接合部に方形刺突をもつものもある。

透孔は、円形と長方形のものがある。

円筒埴輪の他に朝顔形埴輪や鍔付円筒埴輪の破片も見られる。

(3) 器財埴輪（図10-10～12）。

No10、11は階段状に表面を成形し、篦で鋸歯文と数条の沈線を施している。埴輪の形態や文様が草摺と類似しており、篦だけで描いたものではなく非常に写実的な表現を取り入れた草摺形埴輪の破片と思われる。他に武具を表現した埴輪として第３調査区から出土した埴輪棺に転用されていた短甲形埴輪がある（図8-3）。これも短甲の表現が非常に写実的で、円形透かしをもつ径23～25cmの円筒上部に、篦で幅1.5～2.0cmの細長い縦板と方形状にリアルな革綴を表現した短甲を成形している。また縦板の直下には短甲の裾部を表現しているのかラッパ状に開いた形状が作られており、前面、背面、側面をこの裾部表現によってアーチをつけ現わしている。赤土山１号墳に伴う埴輪と思われる。

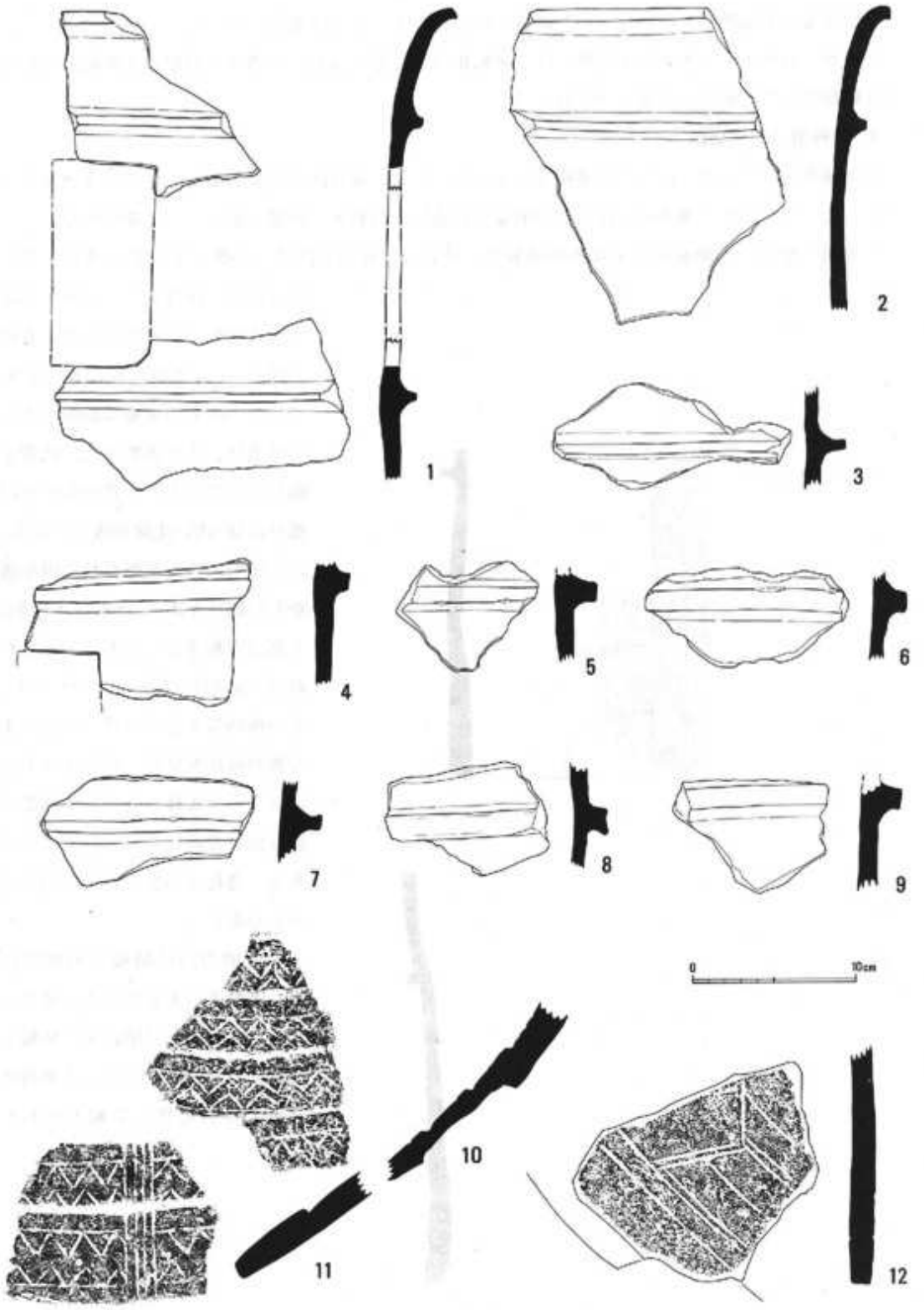



図10　赤土山1号墳出土の墳輪（S¼）

1.2.3.11.12 第9調査区　墳丘裾　4.　第8調査区　上段裾
3.5.6.8.9　第10調査区　墳丘裾　7.　第3調査区　上段裾

No12は蓋の上部破片と思われ、ハケ調整の後、篦によって文様を描いている。

以上から判断すると赤土山１号墳に伴う埴輪類は古く考えられ、古墳時代前期の４世紀後半から５世紀初頭までの範中に位置づけられる。

(4) ２号墳の円筒埴輪

第１調査区で２号墳に伴う円筒埴輪を検出した。よって調査区を拡張し埴輪の並びを確認することにした。そして第５調査区で検出した埴輪列の状況と合わせ、円墳であることを確かめた。

２号墳で検出した埴輪列は全部円筒埴輪で、径40cm、底部と凸帯との間に半円形の透かしをもつものと（図11-２）、径36～38cmで前者のものよりやや小さいもの（図11-１）とが交互に並べられていた。前者の埴輪は器面をナデで仕上げ、ナデ調整の後に凸帯を張り付けている。凸帯の張り付け部分には、浅い沈線が残っている。この埴輪に伴うと思われる円形透かしの破片があり、底部に半円形、上部は円形透かしであったと思われる。後者は、器面をタテハケし、その後凸帯を張り付けている。また他の破片を見ると凸帯より上部にヨコハケＡ種が見られ、凸帯を張り付ける前に施しているようである。透孔は凸帯の上部に円形透かしがある。

２号墳の円筒埴輪は形態的にも、調整的にも非常に古く感じられる。赤土山１号墳に伴う埴輪と比較するのは難しいが、古墳時代前期の４世紀代の埴輪と思われる。

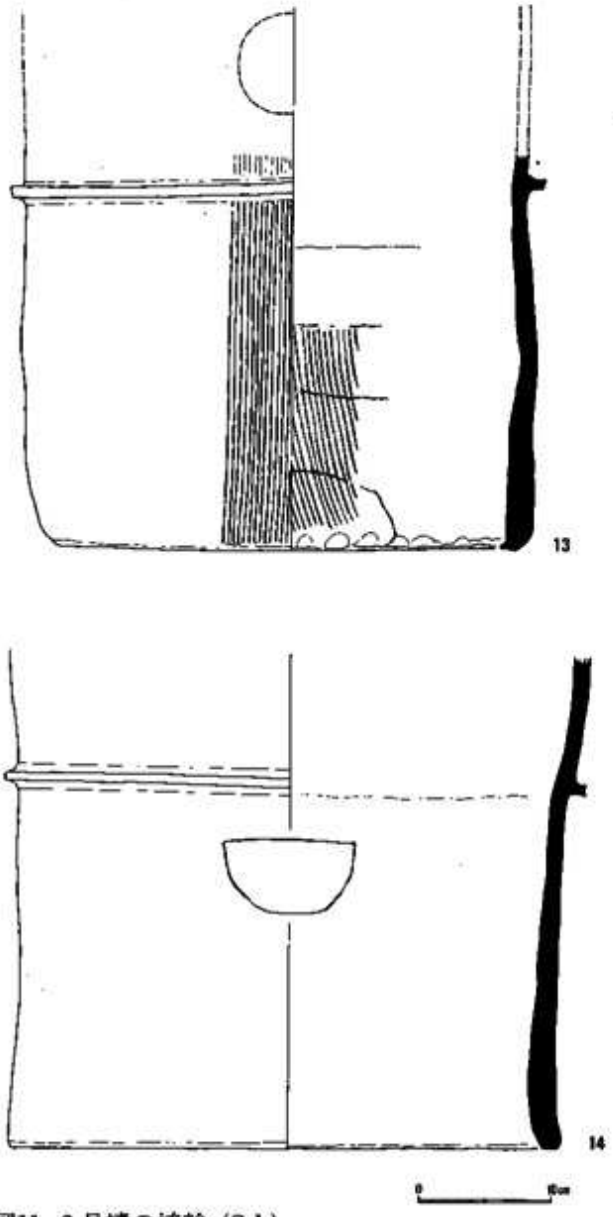



図11 ２号墳の埴輪（S=$\frac{1}{3}$）

# Ⅳ まとめ

赤土山１号墳の墳丘裾を中心にして10ヶ所の調査区を設定した。調査区は、幅１～２ｍで設定したため古墳の全部を把握するまでにはいたらなかったが、測量調査による検討も含めまとめておく。

(1) 墳　形

赤土山１号墳は従来から前方後方墳として知られてきた。後方墳として位置づけられてきた理由は、後方部の側面にあたる北面と南面の墳形が直線的な形態で残っていた点にあった。今回の測量調査においても後方部の側面は直線的な形状であることがわかり、後方部の両側に設定した第４調査区や第８調査区の調査結果においても直線的なスタイルをもつ墳形であることを確認した。特に第４調査区では、おびただしい葺石が伴う墳丘の形状を検出した。ところが昭和58年度に後方部の北東側で掘削工事があり、その際北西のコーナー部にある山道の外側で北西から南東方向に並ぶ14本の埴輪列をおよそ10ｍにわたって検出した。埴輪列は、検出した位置から判断して赤土山１号墳の後方部に伴うものであることは違いないが、埴輪の並びが後方墳特有の角をもつ状況ではなく、コーナーに対して斜めに並んでいたことが判明した。測量調査による等高線の形状と現況から判断すると、後方部の北東コーナーに埴輪列と平行に面する墳形が観取される。また前方部とのくびれから後方部のコーナーにかけての墳形も直角に曲っておらず斜めに流れていることがわかった。よって後方部隅角の形状を直角に成形した曲型的な後方形の古墳ではなく、くびれからコーナーを斜め又は曲線状に成形した独特な墳形をもつ古墳である可能性が強くなった。

赤土山１号墳は、墳丘の北面にある山道までを墳丘の範囲として考えられてきたため２段築成の古墳と考えられていた。ところが、山道のさらに下方にも葺石や墳丘に伴う傾斜面が残っていたことがわかり、調査では墳丘に伴う基底部を従来の認識よりもさらに下方の位置で検出した。これによって新たに前方部が３段築成で仕上げられていたことが判明した。ただし３段築成は前方部の側面のみで、前方部前面は２段築成で成形されており、掘り割り基底部を中段裾部に合せていた可能性が強い。

後方部は丘陵の幅が広くなっている尾根の分れ目に乗せて築いていた。そのため谷筋の下方まで広く墳丘を成形していた３段築成による基底部は、枝分れした尾根筋や谷筋に取り込まれるように成形されていた。よって後方部の墳丘裾は、前方部と異った形態をなしていた。そして枝分れする尾根筋の地形を利用して後方部東半は幅広い２段築成で築き、前方部側の西半は谷筋地形をいかした前方部の３段築成を意識した墳形に区画していた。それによって後方部の東半と西半とで墳形が明らかに異っていることが確認された。また後方部の東側には、造り出し状の墳形が残っており、櫛山古墳などに見られるような特徴的なスタイルをもつ古墳である可能性が強い。造り出しの先端は、すでに削平を受けており原形を損なっていることが考えられる。

赤土山１号墳の墳形は、上段区画によって前方部、後方部、造り出しからなる全体のスタイルが求められる。ところが前方部中段築成は、掘り割り基底部とくびれから後方部の西半にかけて墳形が認められるが、後方部の東側では不明瞭である。また前方部の側面で確認した下段築成による墳

丘基底部は、後方部の側面で自然地形によって区画が消えてしまい、後方部の東半から造り出しにかけては、2段築成で墳丘を区画していたことが考えられる。以上から判断すると、整然とした墳形が築かれていたのは上段築成のみで、中、下段築成は、地山成形を主体にしている点から自然地形を取り込む形で墳丘が区画されていたようである。

(2) 墳丘の大きさ

赤土山1号墳は、これまで全長90mの2段築成による前方後方墳として報告されてきた。今回測量調査によって後方部の東側に造り出し状の墳丘が延びていることも確認された。よってこれまでの認識よりもさらに墳丘が東側へ張り出していたことになり、古墳の範囲をさらに大きく見積っておく必要がおきた。また前方部の前面では掘り割りを検出し（第1調査区）、赤土山1号墳の西限を検討することができた。よって赤土山1号墳の前長を設定するにおいて、前方部の先端を掘り割りで検出した基底までとし、東限を後方部の東側で確認した造り出しを含めて計ることにした。しかし造り出しは、東側の先端をすでに削平されており原形を留めていなかった。よって造り出しの先端を現状の基底から5m前後の範囲として位置づけ、改めて赤土山1号墳の全長を求めることにした。赤土山1号墳の全長は105m～110mと考えられる。

後方部の大きさは、上段で長さ44m、幅32～33m、後方部東半では、下段まで含むと幅53mになる。前方部の大きさは、上段で長さ44m、前端部の幅が推定32～33m、中段まで含むと長さ約50mになる。造り出しは、残存する長さ9～10m、上段の推定幅18～20mである。また前方部の開きを下段築成裾部まで求めると幅がおよそ60mにもおよぶ。

(3) 埴輪列

第2、3調査区で赤土山1号墳に係る埴輪列を検出した。第2調査区では前方部中段裾のテラス部分に埴輪列があり、第3調査区では前方部上段裾のテラス上で埴輪の並びがあった。また後方部北東側の掘削時に出土した埴輪列は、後方部上段裾に伴うものと考えられる。これまでの資料から判断すると墳丘の上、中段に沿って埴輪を並べていた可能性がある。しかし前方部下段にあたる墳丘基底部では各調査区とも埴輪列を検出していない。部分的な区画しかなされていない下段築成の裾には埴輪を並べていなかったことが考えられる。

(4) 墓域について

基底部の外側でテラス状に成形した段築成形を確認した。墳丘の北側では基底部と谷筋との間にテラスがあり、2基の小円墳や後に作られた小石室を検出している。また墳丘の南側では、第8、10調査区で墳丘外に伴うおびただしい葺石を検出し、さらに外側を段築成形で斜面を築いていた。丘陵上に古墳を築くための土木的な痕跡とも考えられるが、古墳に伴う基壇と思われる。

# V　赤土山１号墳の企画性に関する所見

赤土山１号墳の測量図から、墳丘の形や古墳周辺の地形について検討した所、墳形や周辺地形において企画的な部分と思われる点が多くあることに気がついた。よってここでは、赤土山１号墳とそれに伴う墳丘周辺部の企画性について考えてみたい。

なお、企画性を抽出するにあたって後円部を８等分して墳丘の企画性を求める宮川徙氏による方法を応用することにした。また前方部の隅角を基点にして古墳の企画性を求める上田宏範氏の方法もある。赤土山１号墳は、前方部隅角の崩壊が激しく形状に不明な点があるため、上田氏の方法を用い検討を加えることができなかった。

赤土山１号墳は、後方部墳形がほぼ原形を留めていた。よって古墳の主軸線は後方部の形状から設定した。さらに後方部の北東隅で検出した埴輪列と前方部や造り出しのくびれを目安にして後方部の中心点を求め（図20-Ｐ）後円状の輪郭を割り出してみた。後方部を後円状の輪郭に合せて８等分の割り付けをおこなうと、１区の幅が5.5ｍになり、１区を３尋とした場合、１尋が183㎝、１区を４尋とした場合、１尋が137㎝となり、宮川氏の指摘する大尋、小尋には見合わない数値になった。割り付け方法に問題があるが、１区5.5ｍの割り付けでいくつかの企画性が観取されたので、その点について記述しておきたい。

(1) 墳　　形

後方部を直径８区画の後円状の輪郭で示すと（図20-Ａ）８区画の主軸に対して後方部側面は６区画になり、後方部の側面をそれぞれ１区画ちぢめて墳丘を面取り成形していたことになる。後方部の墳形が主軸線に沿って長方形状の墳形に見えるのはそういった点にあり企画性が指摘できる。後方部南面の上段裾にあるテラスは、側面をちぢめた１区画分に一致している。後方部側面のテラスが異状に幅広く造られているのは、側面を８区画の規模に合せていたことが指摘できる。

後方部の墳頂は、主軸に沿って４区画（全長22ｍ）、側面を２区画（幅11ｍ）で成形している。墳頂部も側面の区画がそれぞれ１区画づつ減少していることがわかる。墳頂の隅角は、墳形に合せて斜めに面取されている。墳丘の北側基底部は、後方部上段の裾面から４区画外側にあり、設定した後円状の輪郭からでは、３区画外側になる。そして半径７区画、直径14区画で後円状の輪郭を基底部に設定すると（図20-Ｂ）、後方部南側墳丘裾の外側でおびただしい葺石を検出したテラス状の地点まで含まれることになる。また基底に合せた輪郭（図12-Ｂ）からさらに３区画外側で後円状のプランを設定すると（図20-Ｃ）、墳丘の南側にある丘陵斜面の裾部とほぼ一致し、後方部の北東側まで設定すると、現状では残っていないが、かつてあった後方部北東側の掘り割りの外郭線にみあう可能性が考えられる。

以上から赤土山１号墳後方部の墳形は、円形プランを基本にして考えて見ると基本設計は前方後円墳であった可能性も指摘できる。しかし学史的には、後方部側面の直線的な面取を意識して前方後方墳と位置づけられており、調査においても直線状の面取りを確認している。よって、学史的な設定をとりあえず憂慮し、前方後方墳としておきたい。

前方部は上段で８区画あり（長さ44ｍ）、後方部の規模と一致する（図20-Ｄ）。前方部前面で検出した掘り割りまで含めると９区画で一致している（図20-Ｅ）。前方部上段の前面は、設定した中軸線に対して垂直に一致せず、斜めになっている。現状の墳形を厳密に見ると中軸線から１区画南側のライン上で８区画に一致し、中軸線上やその北側では、８区画に一致しない。ところが、前方部の西側で検出した２号墳の埴輪列から円墳の中心点を求めると、赤土山１号墳の中軸線より北側

図12　赤土山１．２号墳割り付け図

1区画のライン上に一致し（図20-F）、区画の大きさも5.5mで赤土山1号墳の場合と同じ大きさの割り付けで設定することができた。そして2号墳の区画を1号墳の前方部まで延長して計ると、直径4区画で埴輪列のある墳丘の直径が求められ、さらに2区画東外側へ延ばすと赤土山1号墳の中軸線より1区画北側のライン上で前方部上段の前面に一致することがわかった。つまり前方部上段の墳形が中軸線の南側1区画で赤土山1号墳本体の区画に一致し、逆に中軸線より北側1区画のライン上では、2号墳の中軸線に沿った企画性で前方部上段の前面を合せていたことが観取された。

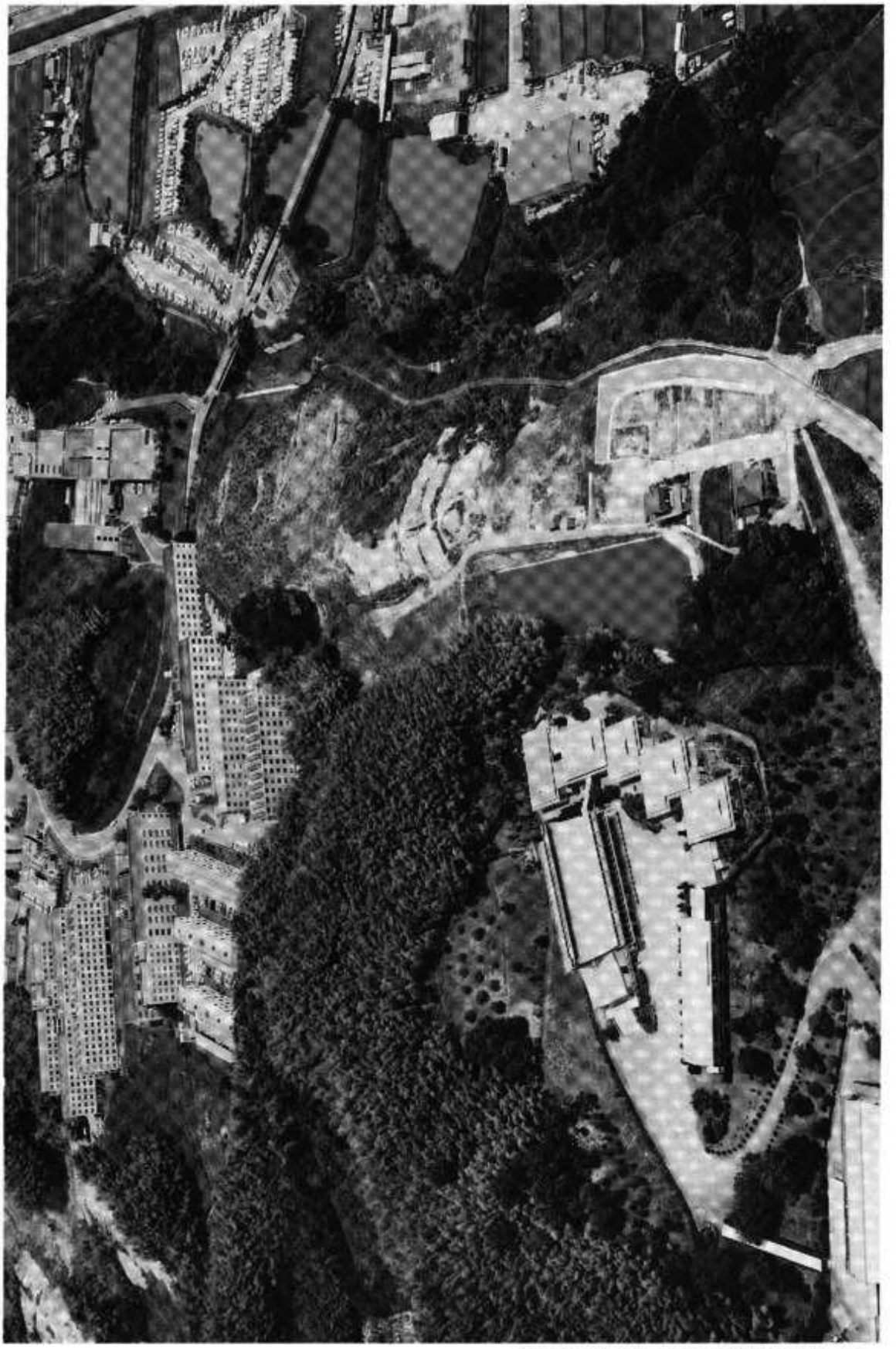
こうしたことから推察すると、赤土山1号墳の前方部は明らかに、2号墳を意識して築いていたことになり、2号墳の方が先行して存在していた可能性が指摘できる。また2号墳に伴って検出した円筒埴輪は、径40cmの比較的大きな埴輪を並べており、赤土山1号墳の埴輪類よりも古く考えることができる。以上から2号墳が造られた後に、1号墳が築造され、その際、2号墳に面した前方部前面や、掘り割りの企画性に2号墳を意識した要素が組み込まれていたことが考えられる。

また2号墳の埴輪列を墳丘裾とした場合、直径4区画となり、赤土山1号墳後方部の墳頂部区画数と一致している。

(2) 基壇築成

赤土山1号墳の北側には、墳丘基底部と谷筋との間に幅広いテラス状の遺構が段築状に残っている。また前方部南面の墳丘基底部から外側にも葺石が伴うテラス状の遺構と段築が残っている。それらを1号墳に伴う基壇と考え割り付けを延すと、それぞれ段築斜面の裾部が中軸線より7区画の線上で一致している（図20-Ⅰ）。特に南側の基壇は第10調査区の東側で南方へ垂直に曲がり、くびれ部の位置と割り付け上で一致している（図20-ｊ）。墳丘外側の基壇と考えられる地山成形にも、墳丘と係りをもつ企画性が観取される。また墳丘北側の基壇上で確認した2基の小円墳の位置も、1号墳の割り付けに古墳の中心がほぼ一致しており、赤土山1号墳の企画性にのった古墳であることが考えられる。

図版1　航空写真



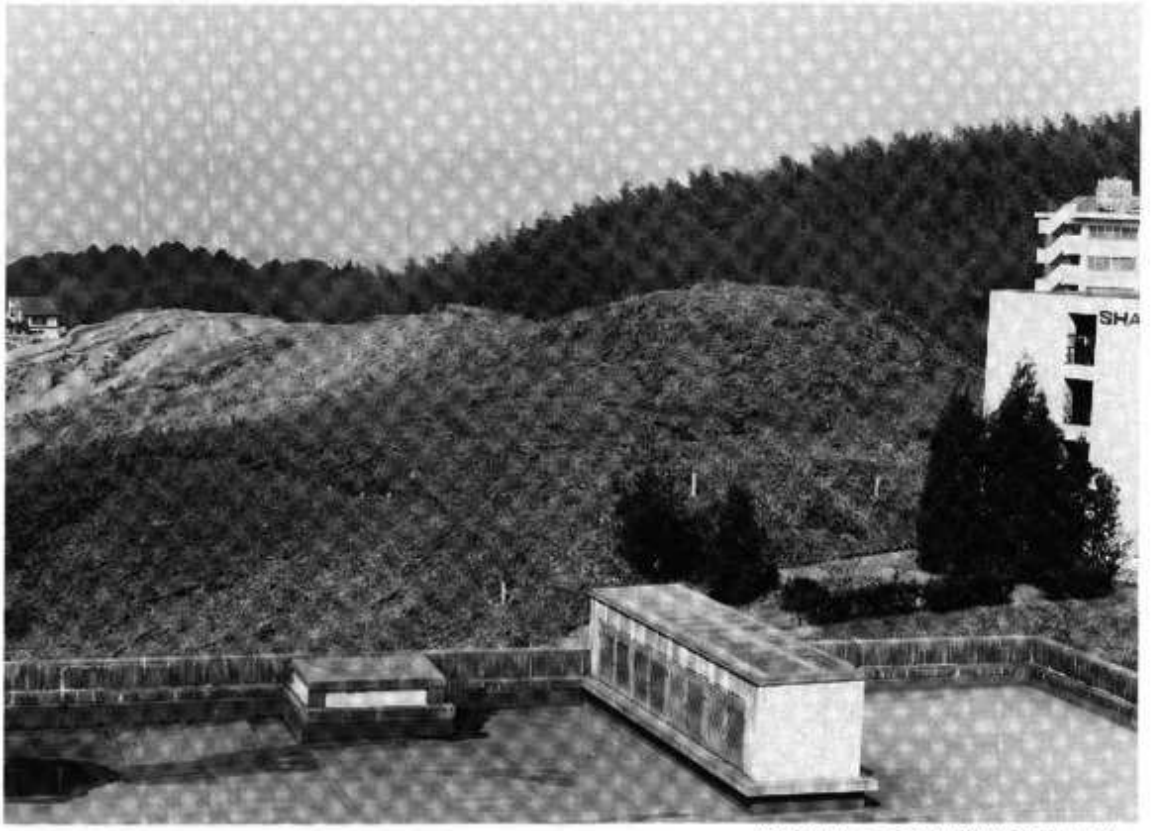
東大寺山と赤土山古墳の遠景（西方から）

図版2　墳丘全景

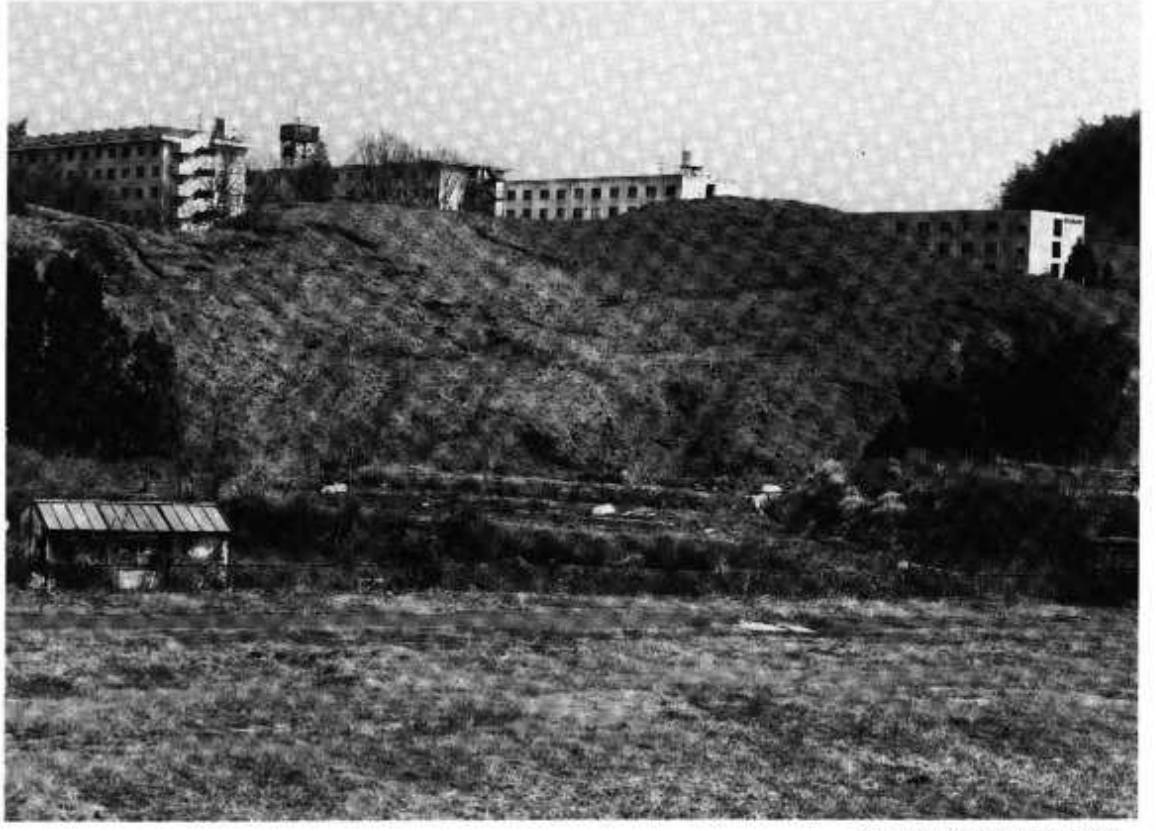
前方部（西方から）

墳丘南側の地形（西方から）

図版3　墳丘全景




後方部とテラス地形（東方から）

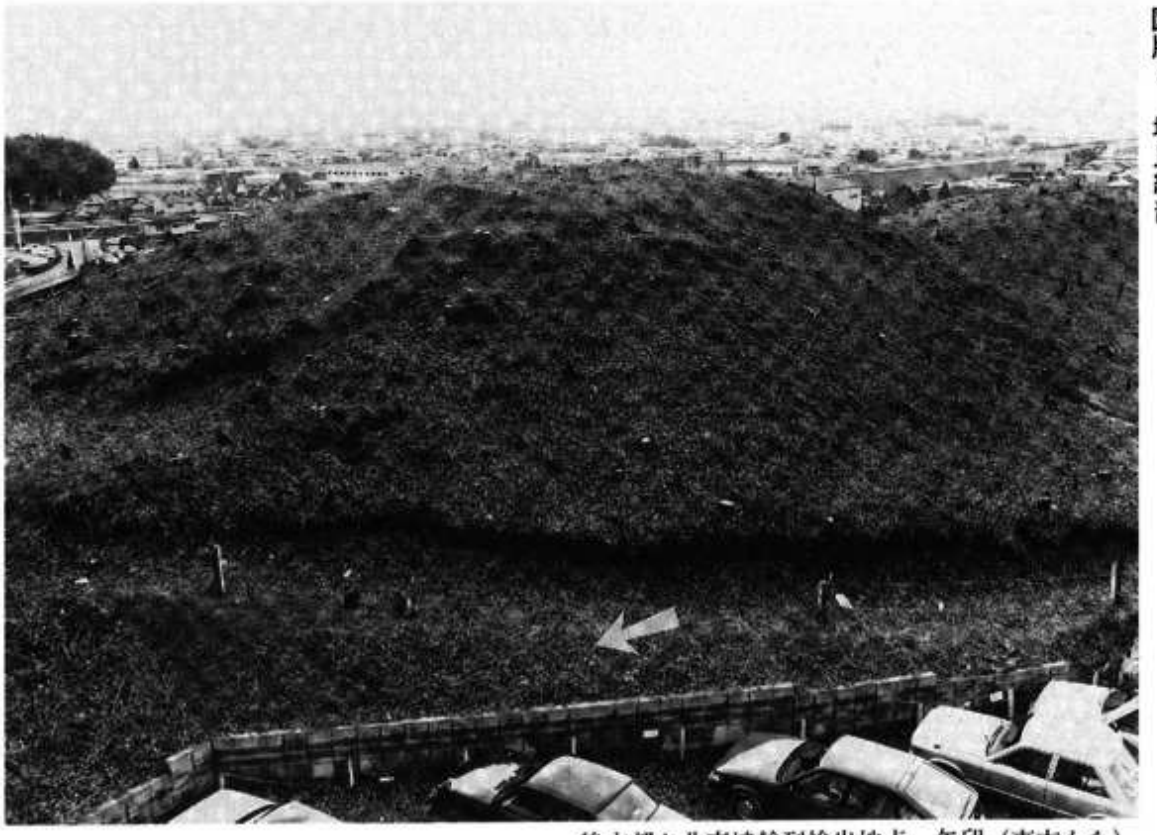


墳丘の南面（南方から）

後方部と造り出し（北方から）

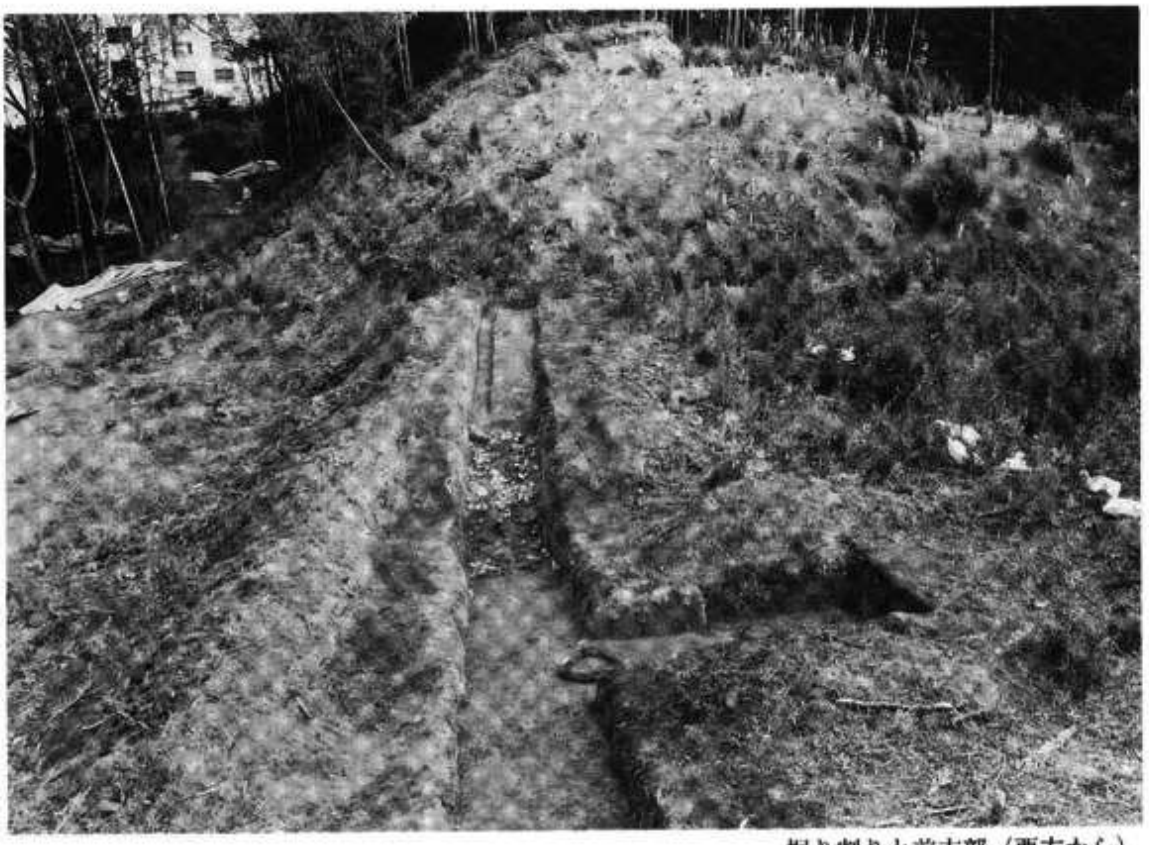
後方部と造り出しの墳頂（東方から）

図版5　墳丘細部

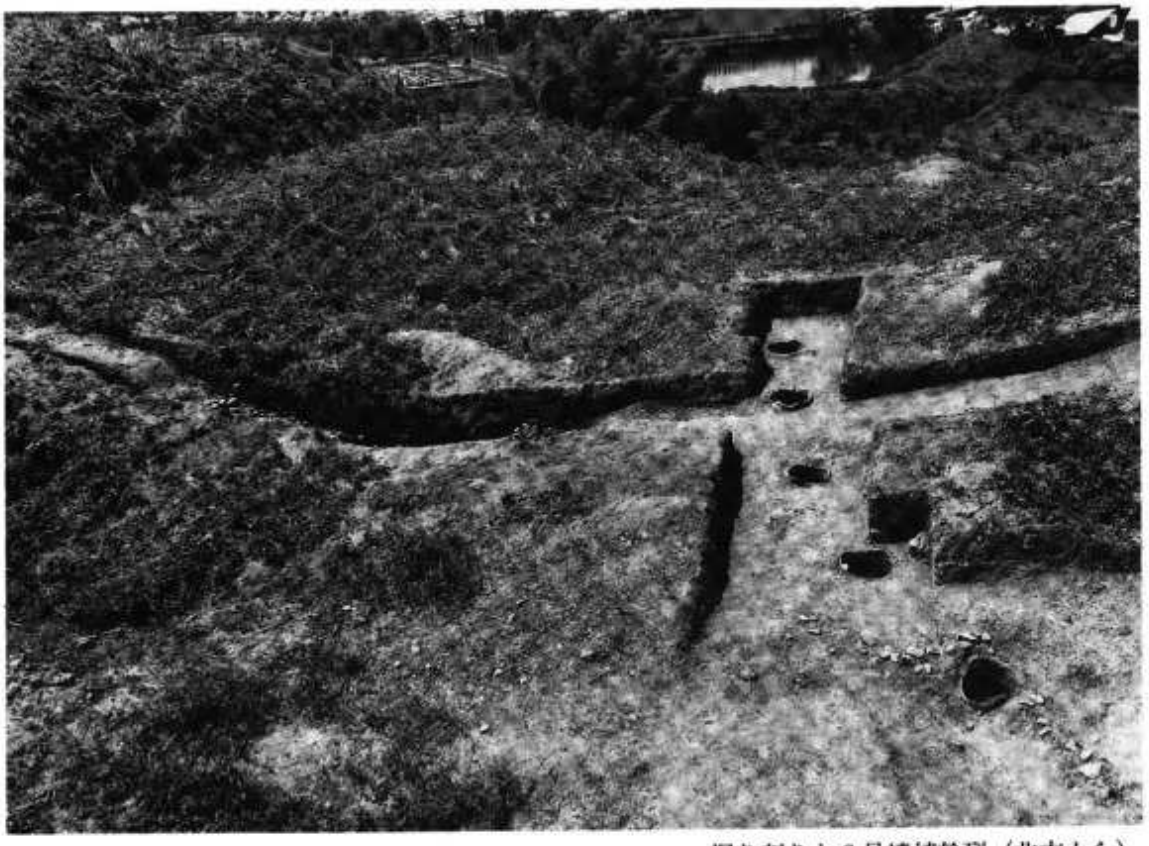


後方部と北東埴輪列検出地点　矢印（東方から）

後方部上段裾のテラス（東方から）

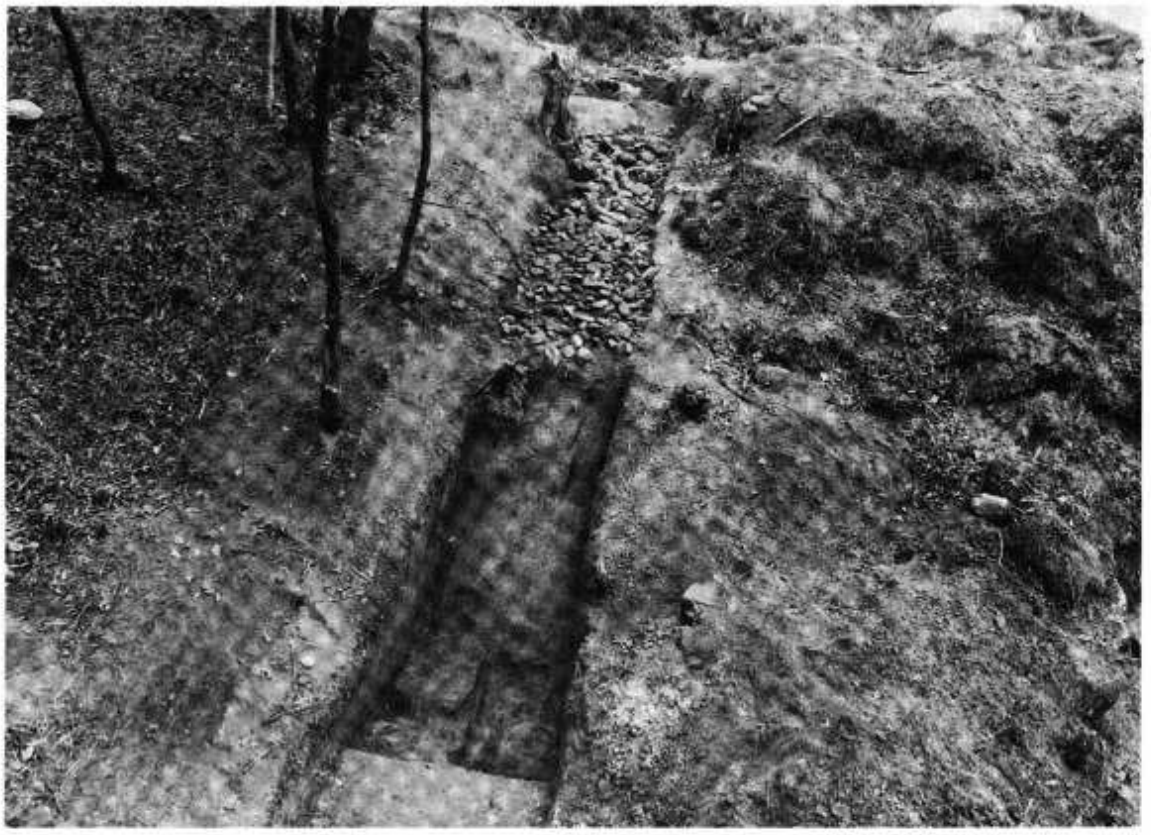


掘り割りと前方部（西方から）



掘り割りと2号墳埴輪列（北方から）

前方部下段斜面の葺石（北方から）



前方部基底の溝（北方から）

前方部上・中段裾の葺石（北方から）

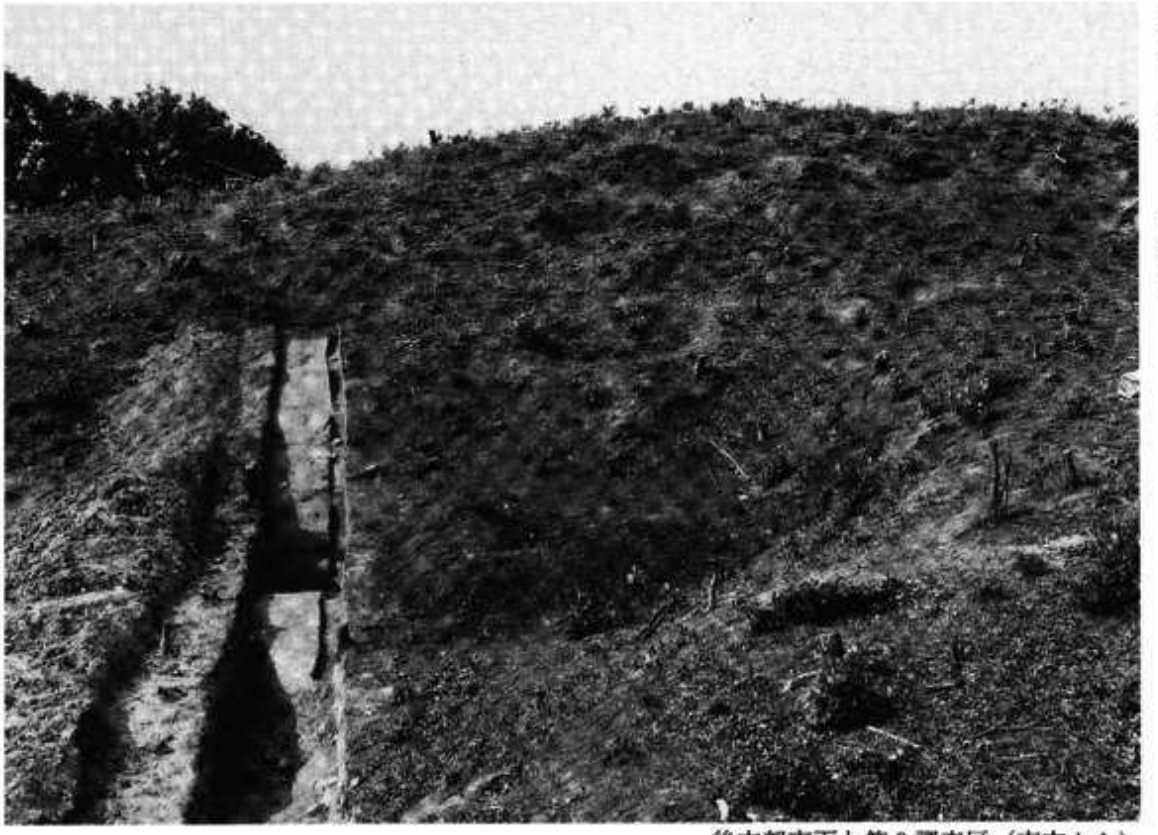
くびれ部基底（北方から）

くびれ部基底の溝（北方から）

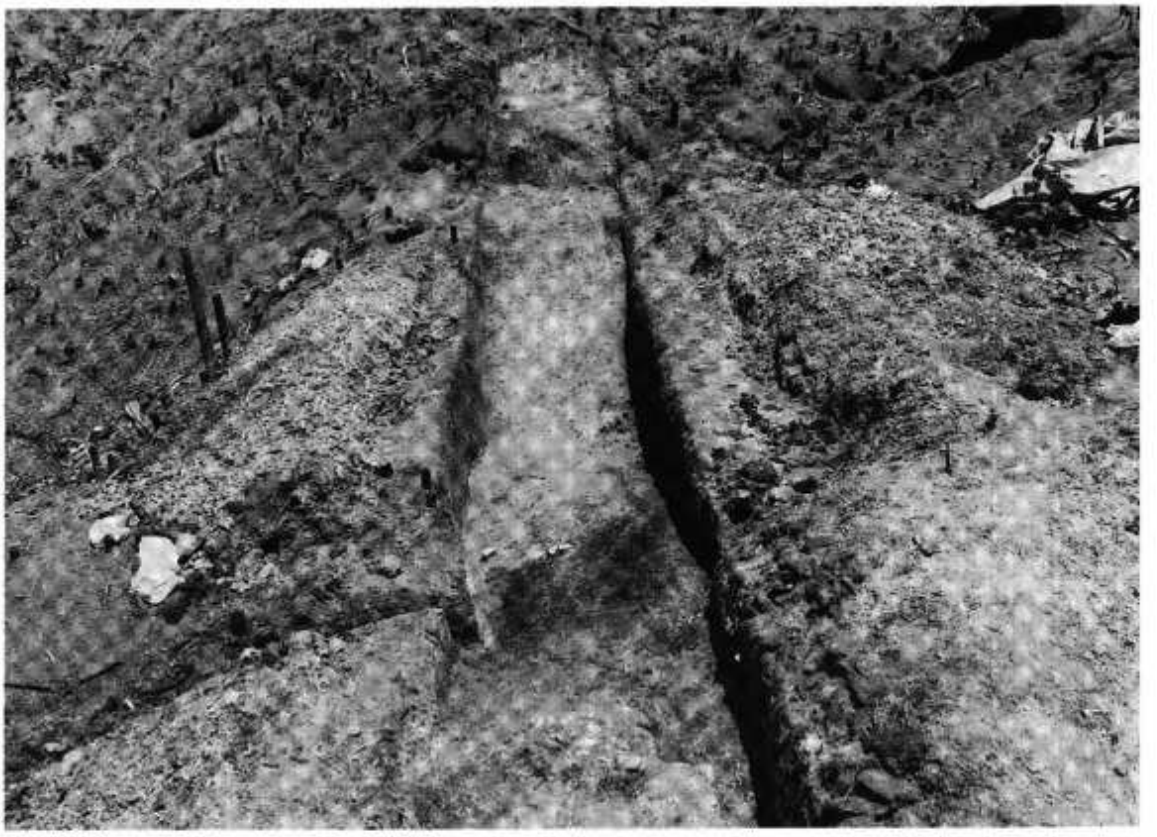
小石室（西方から）

後方部北面の葺石（北方から）

埴輪棺（西方から）

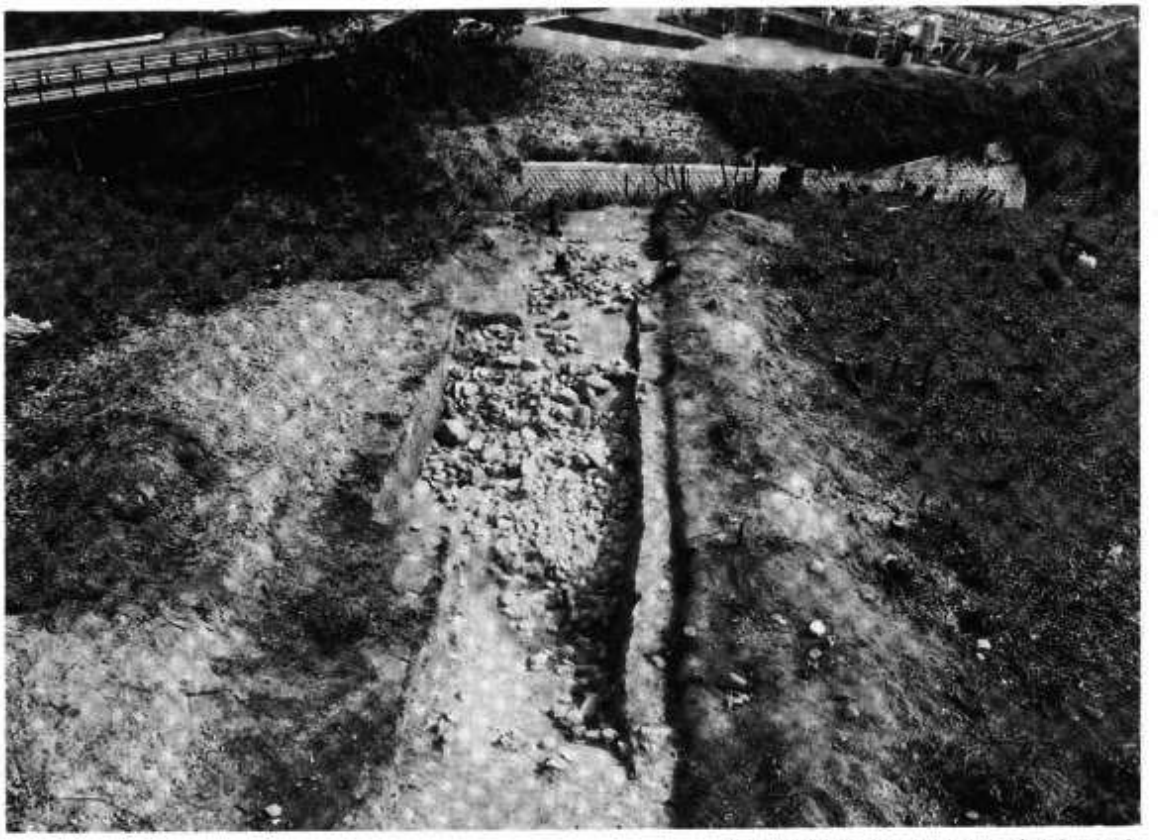


後方部南面と第9調査区（南方から）



第7調査区（南方から）

後方部と墳丘南側テラスの葺石（南方から）



後方部南側テラスの葺石（北方から）